

テーマ 「スクリューとアカン」

第2回漂流紀行文学賞
-1996-



「スクリュー」とは、
船を推進するための回転器機。
「アカン」とは、
缶ジュースや缶ビールが開封されずに
捨てられた状態の呼び名である。
「スクリュー」と「アカン」が
セットで小さな物語になりました。

〈大賞〉

源吉じいさん

細田 洋子（大阪府吹田市）

源吉じいさん 酒飲み漁師
身体からだもお船もぼろぼろよ
おんぼろぼろぼろ ぼろぼろよ
お顔も赤けりゃ お船も赤い
お鼻は酒焼け 錨は赤錆
それでも毎日海にゃあ出掛ける
それが生業なりわい 飯めしの種
漁に行かずばお酒は買えぬ
何が何でも行くわいな
網を一巻 ビールを一箱
必ず積んで行くわいな

源吉じいさん 酒飲み漁師
身体もお船もふらふらよ
あっちへふらふら こっちへふらふら
じいさん揺れれば お船も揺れる
じいさん酒酔い お船は舵無し
大波来たらば暗礁あんしよに乗り上げ
網は無くすし スクリューは折れた
お魚ととが捕れなきゃお酒は買えぬ
どうしたもんかと考えた
海水一口 ビールも一口
考え込んだが答えはひとつ

源吉じいさん 今では隠居
お船と一緒に引退したが
お酒ばかりは止められぬ
あっちでちびちび こっちでぐびり
誰かに集たかっちゃ飲んでいる
心残りはひとつのことだけ
海で無くしたビールが一缶
今頃どこまで流れてる
おんぼろスクリークっつけて
七つの海を一周する気か
早く戻ってきておくれ

源吉じいさん 今日もまた
アカンの帰りを待っている

〈優秀賞〉

プラス思考でいこう！

塩毛 隆司（島根県松江市）

高知沖…

「おい、おまえさあ、アカンだろ？」

さっきから両者とも黙っていたのだが、スクリーの方が先に口を開いたのだ。

「まだ口が開いていないじゃん。なのにどうしてそんなところで流されてんだ？」

アカンの方はさえない顔でしばらく沈黙していたが、やがてポツリポツリと話し始めた。

「あと少しだったんですがね、あと一步のところでのこの始末で……」

「あと一步って、何が？」

「あっしを買ってくれた男ですよ。もう少しで口を開けようとしてここで落ちたんでさあ、海ん中へ。ついてねえ……」

「へえ！じゃあおまえ男と一緒に落ちたってわけ？普通落ちないけどなあ」

「なられて落ちたんでさあ、そいつは」

「なぐられた？誰に？」

「彼女と防波堤んところで待ち合わせだったらしいんですがね、ずいぶんと遅刻して来たんでさあ。男は遅れてきたくせにひと言余計なことを言ったもんで。まあ冗談のつもりだったらしいんですがね。」

「それで彼女になぐられたってわけ？全くさえないやつだねそいつはさあ。で、男は何って言ったの？」

「あれ？まだいたの？ってこうでさあ。」

「おこるよなあそりゃあ」

「あっしは全然悪くないんですがねえ。あっしは誰かに飲みほしてもらうのが使命ってやつで、それが果たせねえってことが気になって気になって夜も眠れねえ始末で。」

「まあそう言うけどいつかさあ、誰かに見つけてもらってきつと飲んでもらえるって。」

「海から流れて来たアカンをですかい？飲まねえと思いますがねえ。」

「おまえってマイナス思考だね、案外。ビールって水ん中で冷やして飲むだろ。海岸でキャンプしてるやつがさあ、間違えて飲むって、きつと。」

「間違えて…ですかい……」

「まあ細かいことはさあ、あんまり気にすんなよ。」

「ところであんたの方はどうなんです？」

「おれ？おれはさあ、けっこう楽しんでるんだぜ。だってふだんはおれ船を進めてるだろ、今じゃ波に進めてもらっているから今までいっしょうけんめいで気がつかなかったいろんなことが見えてくるようになったってわけ。これってさあ、ゆとりができたってやつかなあ。」

「そうじゃなくってあっしが聞きたいのは生き方とかそういうんじゃないで、なんでこんなところにいるのかってことでさあ。」

「誰にも言わないって約束するか？おまえ。そうしたらさあ、話すけど…。」

「あんたあっしに聞いといてそりゃあないんじゃないんですかい？それにあっしはアカンですぜ。口のかたいのだけがとりえってことはあんたも知ってるでしょうが。」

「実はおれ、放置船のスクリューなんだ。」

「放置船？」

「まあ簡単に言うと座礁して動けなくなったんで処理されずにほったらかしにされてる船ってこと。費用がかかるんだとさ。で、助かったのは乗組員とおれだけ。」

「そういうのを助かったっていうんですかい。」

「やっぱおまえってマイナス思考だね。晴れて自由の身になったわけだろ、使命とか忘れてプラス思考でいかなきゃあ。」

「じゃ何でそのことを誰にも話しちゃいけないんです？プラス思考でいくんじゃないかなってんですかい？」

「わかってないねえおまえはさあ。そのことをしゃべっちゃいけないってことは違うんだよ。関係ないの。」

「どう違うんです？」

「おれたちがさあ、もし岸に流れ着いたらおれ達を見つけたやつは何を考えるとと思う？」

「そりゃあもちろん、だれだ海にこんなもん捨てるやつは、けしからんって思うに決まってまさあ。」

「全くおまえってさあ、マイナス思考のかたまりみたいなやつだよ。いいか、きっとそいつは、どうしてこんなもんが流れて来たのかって不思議がるのさ。ロマンチストってやつかな。いろいろ想像するから楽しいのさ。だからさあ、しゃべっちゃだめだって言ってんだよ。」

「そんなもんですかねえ。あっしにはどうしてもただのゴミとしか思えませんかねえ。」

「おまえ知らないだろうけどさあ、美術館なんかに展示されることだってあるんだぜ。」

「あっしみみたいなもんもですかい？」

「ま、あとは波まかせってとこかな。けどもし万が一展示されても絶対に口を割るんじゃないぜ。黙ってにこにこしてんだぜ。」

「ロマンチストってのに拾われてえなあ。」

「おまえも少しはプラス思考になってきたね。その調子その調子。お？砂浜が見える！」

〈優秀賞〉

夢のかげら

平林 糧（岐阜県岐阜市）

僕が小学生の頃、中山優一という友達がいた。優ちゃんはたしか僕より二つ年上で、僕が初めて自転車に乗れたのも、釣りを教わったのも優ちゃんからだ。優ちゃんは、よく僕を連れて遊びに出かけた。磯辺でナマコやカニや僕が始めてみるような生き物をバケツ一杯に取ったりして僕らは一日中を過ごしていた。その頃引っ越して来たばかりの僕にとって、遊び相手は優ちゃんしかいなかった。けれど、それだけの理由で僕は優ちゃんといた訳ではなかった。

優ちゃんの夢を聞いたとき、僕は信じられないくらい感動したのを覚えている。僕はひねくれ者だったから、たとえば戦争や可哀想な話や映画なんかを見ても簡単に泣いたりしなかった。前にクラス全員が何かの話で泣き出してしまったことがあった。先生までもが、それは女の先生であったが、泣いているのを見てただ当惑しただけだった。しまいには「僕も泣いた方がいいの？」と質問して先生を困らせていたのだった。

そんな僕が優ちゃんの夢を聞いて感動したのは、たぶん僕にとって生まれて初めての心の大きな動きだったのではないだろうか。そして、僕は優ちゃんに付いて廻るようになり、山生まれの僕は次第次第に浜っ子になっていったのだった。

ある日、僕らはいつもの様にしてまた海岸に遊びに出かけた。その日は日曜か何かで、朝から遊んでいて昼頃にひどくお腹がすいたのを覚えている。僕は海というモノは白い砂浜がずっと広がっていて、遠くに小さな島が見えるものだと信じていたが、それは甚だ間違いだった。その海岸には防波堤のコンクリートの固まりとゴツゴツした岩山と黒いじゃりじゃりしたホンの少しの砂浜しかなかった。だから、遊び場所には困ることがなかったのだけれど…。そんな所で僕らは岩場で飛び込んだり、コンクリ山で釣りをしたり、磯辺でヒトデを集めたりして遊んで過ごしたのだった。

その日、優ちゃんは僕を砂浜に連れていった。そして、そこに放置されている小屋の中に入って僕は優ちゃんの夢を初めて聞かされたのだった。優ちゃんは船に乗って遠くの島へ行きたいと呟いた。それから熱っぽく語り始めたのだったのだった。

「缶詰がいる。」

そしてあそこに置いてある船で行こう、と優ちゃんは浜辺に乗り上げてある古い船を指差した。その晩、僕は興奮して眠れなかった。船に乗って遠くの島に行く。それはどれほど僕の心をわくわくさせた事だろう。次の日から僕は優ちゃん

とその海賊計画を練り始めたのだった。(なぜその事を海賊計画と呼んでいたのかはわからない。僕らはきっと、わくわくする名前をただ欲しがっていただけだったのかも知れない。)

それから、優ちゃんと僕はどこの島へ行こうか、とか、原住民に出会ったらどうしよう、とか、でもすごく遠くの島へ行くから食べ物がたくさんいるんだ、とか話し合った。そうして、本当にやっと僕らは出発の日にちを決めたのだった。しばらくして、波止場の倉庫のカンヅメの箱がひとつ無くなった。

その日の朝がなんと待ち遠しかったことか。夜中に僕はごそごそと起き出して何度トイレに行ったことだろう。僕の頭の中には僕の持ち物である、カンキリとりんと船と島のことしかなかったのだ。そうしていつの間にか僕は安眠して、やがて出発の朝を迎えたのだった。翌朝、僕は時計を見て目の前が真っ暗になるくらいびっくりしてしばらく呆然としてしまった。約束の時間をとっくに過ぎていたのだ。そうして外に出て僕は初めて台風が来ている事を知ったのだった。僕はあわてて砂浜に向かった。風がごうごうと唸り声を上げていた。波が高く、しぶきが遠くまで飛んできた。僕の胸は不安と寝起きの呆然と後悔で痛かった。そして、そこに船はなかった。

優ちゃん行ってしまったのだ、ひとりで。僕は置いていかれたのだ。「なんで…」僕は呟いて、それでも海の上に僕らの船がないか探していた。優ちゃんの乗っていった船を探していた。

「ふね、流されちゃったな…」

僕は振り返って、そこに優ちゃんを認めた。

「流された…」

「ああ、もったいなかったな。でもしょうがないや。」

優ちゃんはそう言って、今度は何して遊ぼうか、と僕に向かって微笑んだのだった。